

## “ A New England Nun ” における事実とリアリティ

著者	米山 雅浩
雑誌名	名古屋学院大学研究年報
号	26
ページ	1-12
発行年	2013-12-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15012/00000565">http://doi.org/10.15012/00000565</a>

## “A New England Nun”における事実とリアリティ

米 山 雅 浩

### 要 旨

従来の読みでは、“A New England Nun”の主人公Louisaは、心変わりした婚約者のため自ら婚約解消を申し出たとされてきた。だが14年間に及ぶ婚約期間に築き上げた独身生活の質を維持するため、誰の名誉も損なわずに破談にする方途をしたたかに追求したというのが真相である。しかし、「芸術家」的独身生活の果てにはWakefieldやEmilyのように、「世界から見捨てられし者」となる運命が待っている。また、この小説には非生産的生涯を過ごすための経済的裏付けに対する言及がないため、Louisaの選択はリアリティに欠け、それが作品の価値を損なっている。

キーワード：Mary E. Wilkins Freeman, Thorstein Veblen, “Wakefield,” “A Rose for Emily”

一見すると、Mary E. Wilkins Freemanの“A New England Nun”<sup>1)</sup>は、まさにlocal coloristと分類された作者にふさわしい書き出しとなっている。だが実際は、Thomas Grayの“Elegy Written in a Country Churchyard”<sup>2)</sup>の第一連を想起させる、長閑で郷愁を誘う日暮れの農村の光景を、偽装している。“Elegy”初読後は誰もが、世に出る機会がないまま死んでいった才人たちを悼む詩人の哀惜の強さに驚くだろう。“A New England Nun”冒頭の数段落は田舎で暮らす独身女性の生活の細部を丹念に描き、その後に現代の読者を静かに動揺させる展開になるとは予想させない。主人公Louisa Ellisは、Herman Melville描くBartlebyのように、静かに自己を押し通し、そして静かに滅びていく。Bartlebyと同様に、格別の技能・才能に恵まれていないのに、孤高の芸術家のような生き方を妥協なく貫くのである。読者が感応するのは、偉大な人生に対してばかりではない。“Elegy”の詩人がそうだったように、名もなきBartlebyやLouisaの人生と交感することもある。作者Freemanが主人公の人生にどのような感情を通わせているか、議論は尽きないが、結局は不明である。だが、それを読者に期待したことは、作品の構成から明らかである。Louisaの芸術的才能が、世間はおろか本人さえ気づかずに狭い家の中に埋没し、Louisaとともに朽ちていくことへの哀惜と言えようだろうか。“A New England Nun”読後に哀感が強いのは、Louisaがこのまま死のように単調な日々を過ごし、老いて死んでいくことを読者が思い浮かべずにはいられない、その作品の構造にある。“Elegy”の主題に引き寄せるのは強引な解釈ではあるが、“A New England Nun”に一貫するpathosをよく捉えていると言うべきであろう。

一日の仕事を終えた貧しい農夫たちが家路に向かう光景。第一段落はこう要約できるだろう。

続く数段落はLouisa Ellisのとりわけ裕福ではない、主婦のような暮らし向きを描いている。もはや「自分の一部」(“a very part of her personality”, 22)と化した裁縫道具で午後じゅう縫物を楽しんだあとは、庭にアカスグリの実を採りに行き、茎は鶏小屋に撒き、時間をかけて茶の支度をし、そのまま夕食としてケーキ・ビスケット・レタスを存分に楽しみ、裏庭に行き犬に餌をやる。表面的にはこれがLouisaの一日であり、このような日々が生涯続くのである。これらの段落はLouisaの穏やかで単調な生活を明示するためのものであるが、作者はのちにLouisaが見せる真実の姿を垣間見せている。Louisaは庭のアカスグリの実を采るのに緑の前掛けを身につけ、緑色のリボンのついた麦わら帽子を日暮れどきに被り、実を入れるために青い陶器の鉢を用意する。とりわけ茶器には格別な嗜好をもち、ピンク色の磁器の紅茶碗と受け皿に銀製のクリーム入れを日々自分一人のために使っている。隣人たちは安物の陶器を常用し、高級磁器は応接間の戸棚に飾ってある。Louisaは人目を意識しないのにお洒落であり、一方で、その有閑階級的な趣味は近隣の注意を惹きつけずにはいられない。Louisaが周囲と比してとくに裕福でもなければ、名家の出でもないからである。しかし、彼女は周りの目を気にせず自分の趣味を追求する逞しさをもっている。

飼い犬Caesarの初出は、のちに比喩的に重要な役割を担うことをまったく予想させないほど、あっさりしたものである。Louisaは、“Caesar! Caesar!”と呼び、鎖の音とともに近づいてきた犬を軽くなで、トウモロコシパンの餌をやり、母屋に戻る。ただそれだけである。長年ごく狭い場所に拘禁されているこの犬は、Louisaの自己幽閉、男性恐怖、本能的衝動などを象徴すると解釈されてきた。Louisa自身は他人がこの犬に近づくことを様々な理由から好まない。Joeとの結婚はCaesarにとって解放を意味するが、飼い主は婚約破棄によってその機会を潰す。この老犬の末路は現在と同じく、短い鎖でつながれたまま狭い小屋で過ごし、飼い主からとくに愛情を受けずに飼育されるものであろう。作者Freemanは実際にこのような犬を目撃し、涙が出そうになったと書簡に残している。作者と女主人公との距離を推し量る論拠のひとつになる<sup>3)</sup>。

Caesarへの簡素な言及とは対照的に、蛙の鳴き声があたり一面に執拗に響き渡る様子は、丁寧に描写されている。蛙の求愛行動が、自らの婚姻問題に患うLouisaをさらに煩わせているそのとき、婚約者Joe Daggetが訪ねてくる。巧みな設定である。LouisaはJoeが家にいることへの嫌悪を隠さず、Joeも居心地の悪さを隠さないでいる。蛙を如何にもうさく描いたあとなので、婚約者に対するLouisaの理不尽に冷淡な態度も何がしかの説得力をもつことになるが、この時点で読者は語り手が蛙の鳴き声にわざわざ触れた理由はわからない。Joeの訪問時刻に合わせて、Louisaは裁縫用のピンクと白の前掛けを脱ぐ。その下には白の前掛けがあり、この一番下の前掛けは接客用と決められている。時に三重になるLouisaの前掛けには、彼女の処女性との関連で象徴的な意味が込められていると、ことにフロイト学派は主張してきた<sup>4)</sup>。納得のいく議論であるが、Louisaが自分で決めた実用上の規則に沿って前掛けを使い分けている事実も軽視できない<sup>5)</sup>。

帰国以来Joeは週2回Louisaを訪れている。Louisa以上にJoeの訪問に強い反応を見せるのが、カナリアである。彼が部屋に入ると必ずカナリアは目覚め、羽が籠の針金を打ちつけるのも構わず、荒々しく羽ばたく。このカナリアにもフロイト流の解釈が適用されてきた。説得力ある議論

だが、精神分析的アプローチでは、作者がカナリアの性別をわざわざ雄とした理由が解明できない。一般にカナリアの雄雌の区別は素人には難しいという。作者に相応の理由があってカナリアの性別を雄と設定した可能性は捨てきれない<sup>6)</sup>。そのJoe Daggetはかなり大柄でありながら(“He seemed to fill up the whole room.” 23), Louisaの前では態度がぎこちない(“uneasiness” 23, “colored,” “embarrassed,” “awkward,” “flushed” 24)ことが明かされている。女性の控えめな態度を形容する語がここで使われているのは、注目に値する。Louisaは何の意図かLily Dyerの名を出すものの、それに動揺を隠せないJoeに対して、とくに何の反応も示さない。ふたりの噛み合わないやりとりからJoeに関して判読できることは、彼は正直で小心気味な独立自営農の大男であること、病気の老母の世話をすべき立場にあること、少年の面影を残すが若いとは言えないこと等である。Joeも他に頼れる肉親と同居していないようであるが、それにもかかわらず恐らくは当時から病弱だったはずの母親を14年間も放置した。Joe Daggetの人物造形上の謎である。

Louisaに関しても見逃せない記述がある。Joeよりも幾分若く、容姿も肌の色艶もJoeに勝る一方で、Joeよりも年上に見えるという。Lily Dyerの若さや美しさと露骨に対比されている。もう一点は、Louisaは自分で定めた秩序に異常に拘泥することである。食卓にはサイン帳のほかに母親の形見の*The Young Lady's Gift-Book*が重ねて載せてあり、サイン帳を下にするのがLouisaの決まりだった。手持無沙汰から本に手を伸ばしたJoeは、無造作に上下反対に重ねて戻した。Louisaの反応はJoeには不可解なものだった。“‘Now what difference did it make which book was on top?’ said he. Louisa looked at him with a deprecating smile. ‘I always keep them that way,’ murmured she.” 理由にならない理由を超然と言い放つ態度は読者の目にも尋常でない。

この緊張した場面を救うのは、いわばcomic reliefとしてのJoeの一連の失態である。“... [He] rose to take leave. Going out, he stumbled over a rug, and trying to recover himself, hit Louisa's work-basket on the table, and knocked it on the floor. He looked at Louisa, then at the rolling spools; he ducked himself awkwardly toward them ...” このひとり芝居は当時の読者の笑いを誘ったに違いない。現代の読者はマルクス兄弟でさえ素直に笑えないかもしれないが、19世紀末には、トーキー映画の喜劇役者の登場を待つ準備ができていたのだろう。だが、これに続くLouisaの言葉は温かみに欠ける。“‘I'll pick them up after you're gone.’” 作者はJoeを純情で善良な婚約者とし、それにLouisaの冷徹な強情さを対比させていると見るべきであろう。作者がユーモア感覚を見せている場面はその後も続く。“[Joe] felt much as an innocent and perfectly well-intentioned bear might after his exit from a china shop. Louisa, on her part, felt much as the kind-hearted, long-suffering owner of the china shop might have done after the exit of the bear” (25). 語り手がLouisaをkind-heartedと評しているのはどういうわけだろうか。親切で優しい面を併せ持つことは完全には否定できないが、これまでの場面ではそうした資質は見せていない。このあと「心の優しい」Louisaは箒と塵取りを取出し、「Joeの足跡を丹念に掃き取った。」(“[She] swept Joe Dagget's track carefully”). Joeの痕跡を消し去りたいのは、敷物からだけではあるまい。語り手はJoeがこの屈辱的な扱いを知ったとしても、Louisaに対する忠誠は少しも変わらないと断言する。“If he could have known it, it would have increased his perplexity and uneasiness, although it would not have

disturbed his loyalty in the least.”ここで語り手は、愛はすでに Louisa の側にも Joe の側にもなく、ただ 15 年前の約束を履行することが互いに示すべき誠意であるとの義務感だけが、ふたりを結びつけていることを暴露している。潔癖症で神経質な Louisa が独善的な秩序意識で Joe の挙動のひとつひとつに不審の目を向けているこの部屋を、語り手は Joe の視点で「蜘蛛の巣」に例えている。それでも彼らは名誉のため婚姻は成就すべきとの観念に囚われ続けている。

Louisa が Joe に「100% の忍耐と忠誠と尊敬を強要」(“Louisa commanded perforce his perfect respect and patience and loyalty.”) できる根拠は、明言されていない。それに続くのが、Joe が財を成す目的でオーストラリアへ渡り、音信不通に近い状態で婚約者を 14 年間も放置したくだけりであることから、Louisa の冷やかかで酷薄な態度は Joe への懲罰であると捉えるのが筋であろうが、そのような議論はまだ聞こえてこない。この 14 年間の不在の部分は、自然主義的とも評される Freeman が執筆した割には、他の緻密な描写に比して著しくリアリティ<sup>7)</sup>を欠き、Joe の人物造形も不安定な印象を与える。アメリカ西部フロンティアが消滅しつつあり、オーストラリアでゴールドラッシュが起きていた時代背景や、家族や婚約者の待つアメリカにできるだけ早く帰国しなければならない事情を考慮すれば、Joe がなぜこの国を選びどんな手段で財産を作ろうと目論んだのか推測できる。正業を立ち上げるのにオーストラリアは彼にはふさわしくない場所である。悠長に事業を始めるためではなく、一獲千金を狙ってオーストラリアに渡ったのであろう。しかし、予想よりはるかに手間取り、結婚資金を得るのに 14 年かかってしまった。Joe は決断力があるが、冷静な計算のできない男という設定にしたかったのだろうか。独立自営農の嫡男で病身の母を抱える状況は、14 年後とさほど変わるまい。富を得るまで「50 年経っても居続けるだろうし、……結婚のため帰国することもない」と語られるとおりなら、そもそも渡豪した目的から逸脱している。意志が強く思慮が浅い人物を思わせる。オーストラリアの件から知る Joe の人物設定は、Louisa の前で見せた内気で不器用な姿や、結婚を理由に母との別居を選べず婚約解消も言い出せない優柔不断さと首尾一貫していない。また、この妙な形態の婚約を Louisa 本人のみならず彼女の母や兄も認めたはずであるが、非常識な話である。まして、Louisa の母は際立って冷静な洞察と穏やかで優しい気質で知られた人である。(“Her mother was remarkable for her cool sense and sweet, even temperament” 26). 標準的な婚約期間を 1・2 年と見積もっても、そんな短期間に外国でひと財産作れるなどといった夢物語を誰が信じるだろうか。14 年間に及ぶ婚約者不在の婚約期間は、物語の最重要な構成要素のはずである。恐妻ゆえ 20 年間も姿をくらました Rip Van Winkle のパロディを狙っていないのなら、オーストラリアの一件はもっとリアリティの点で慎重に扱われるべきだった。

母親から推薦されるままに Joe Dagget を将来の伴侶として自然に受け入れた娘時代の Louisa であったが、転機は急に訪れる。最初の 7 年が経過して、心境の変化が訪れた。Joe の帰りを待っていることに変わりはないが、「彼女の生活は……心楽しい平穏に満たされるようになっていた」(26)。それがどんな生活かは端的に書かれていないが、結婚を前提としない独身者の生活であることは間違いない。“Louisa’s feet had turned into a path ... so straight and unswerving that it could only meet a check at her grave, and so narrow that there was no room for any one at her side.” “[S]he

had fallen into a way of placing it [their marriage] over the boundaries of another life.” とくに最初の引用文の前半は曖昧だが、本人も気づかぬまま生涯独身を辿る道に入り込んでしまったという意味であろう。深層心理は自覚できないからこそ、突然Joeが戻ってきたときのLouisaの反応は「狼狽」（“consternation”）であり、狼狽したことを自ら認められなかったのである。

興味深いことに、語り手はこの直後にJoeにも同じ“consternation”を使っている。それがなぜかは極めて曖昧であるが、こう読めるだろう。14年ぶりに再会したLouisaは上品な優美さを変わずに保っていたし、14年間JoeはLouisaのことだけを考えていたと自ら確信している。それは帰国後も変わらないと信じていたが、どうも別の女性のことが頭を離れない。そのことがJoeを「狼狽」させた。“All the song which he had been wont to hear in them [his ears] was Louisa; he had for a long time a loyal belief that he heard it still, but finally it seemed to him that although the winds sang always that one song, *it had another name*” (26-27, emphasis added). 両者の「狼狽」は性質を異にするものの、その先にあるものは一致している。すなわち、もはや両者とも自分が結婚を希望していないことを明瞭に認識したのである。それでもLouisaは婚礼衣装の仕立てに余念がなく、Joeも週2回の訪問を欠かさない。どちらも相手の「狼狽」を知らず、相手の名誉を守るのが第一の義務と信じているからである。

続く長い段落でようやくLouisaがこの結婚を厭う理由が、Louisaの視点で明かされる。まず目を見張るのは、Joeの母親に対する遠慮のない評言の数々である。“[T]here would be Joe’s rigorous and feeble old mother to wait upon;” “Then Joe’s mother would think it [to distill essences for the mere pleasure of it] foolishness; she had already hinted her opinion in the matter.” “Joe’s mother, domineering, shrewd old matron that she was even in her old age ... would laugh and frown down all these pretty but senseless old maiden ways” (27). Louisaは嫁の息抜きに理解のない姑像を想定している。しかも、敵は義母だけではない。最大の仮想敵はJoeである。Louisaはそのヴィジョンの恐ろしさに戦慄せざるをえない。“She had visions, so startling that she half repudiated them as indelicate, of coarse masculine belongings strewn about in endless litter; of dust and disorder arising necessarily from a coarse masculine presence in the midst of all this delicate harmony” (28). LouisaがJoeの残した足跡を必死で清めたその神経症的な場面が蘇るようである。もはやこの痛切な嫌悪の対象は汚れではなく穢れであり、JoeはLouisaの清澄な世界を穢し消滅させようとする究極の敵である。こうしたことから明らかなように、Louisaが結婚を望まないように見えるより大きな理由は、彼女にとって独身生活の喜びのほうが大きく、それを捨てることが最大の恐怖であるからだ。冒頭の数段落で紹介された穏やかで満ち足りた自由な日常生活は、一人暮らしだからこそ享受できた特恵であり、環境が変わればたとえJoeの家でなくても、そのすべてが失われるのは自明である。まして、日常生活の細部に対する審美的な執着から、語り手に“artist”と揶揄されるLouisaである。結婚は厭わしいものだが、結婚の約束を果たすことが互いの名誉を守ることであり、そのこと自体がこの結婚の目的であるとする価値観に疑念の余地はなく、だからこそLouisaは黙々とそして淡々と一週間後の結婚の準備を続けるのである。

続くCaesarにまつわる長い2つの段落で、この犬が近隣に与えかねない危険を深刻に懸念し



ていることが、彼女が結婚を心理的に避けている最も大きな理由であるかのように、語り手は Louisa の視点に立って語る。St. George の龍に例えられるなど、Caesar の獐猛さはすでに村の神話となっていて、日ごろ接している Louisa さえこの老犬の日常的な穏やかさに信を置いていない。Louisa の数多の心配ごとのなかでも度外れて極端なものが、Caesar の凶暴性に対する極端な評価である。成犬になる前に隣人に深手を負わせて以来、Caesar は小屋周辺を離れられないのに、住民の脅威であり続けている。今の Caesar の性質を知らず、鎖の頑丈さを知らない人々にとって、その恐怖はリアリティをもつ。Louisa さえも Caesar が本質的に獐猛であると信じて疑わない。ひとたび放たれるや Caesar は惨劇をもたらすと信じ込んでいる。とくに、いたいけな子供たちが路上で血を流して倒れている姿を妄想するあたりは、残酷で行き過ぎた誇張であり、Louisa の子供一般に対する嫌悪感や憎悪に近い感情さえ覗わせるものである。ところが、Joe は Caesar の性質を「あるがままに」(29) 評価し、結婚後は拘束を解くと宣言して Louisa を恐慌状態に陥れる。このくだりでは視点を Joe に移すことによって、いわばヒステリー状態の女性たちや子供たちの目を見た Caesar とは異なる Caesar の姿を、巧みに読者に提示している。肥大化された伝説ではない現実の Caesar は、罪のない表情の、隠者のような、太って眠そうな、目のかすんだ、老犬である。“a veritable hermit of a dog,” “innocent-looking old dog,” “Old Caesar,” “fat and sleepy,” “dim old eyes” (28). 少なくとも Joe の目にはこのように映る。“Joe Dagget ... saw him as he was. ... He strode valiantly up to him and patted him on the head, in spite of Louisa’s soft clamor of warning, ... ‘There ain’t a better-natured dog in town,’ he would say, ‘and it’s downright cruel to keep him tied up there. Someday I’m going to take him out’ ” (29). Louisa の恐れは彼女自身にとっては真実であるが、妄想の産物なのである。

“A New England Nun” ではほとんど唯一の動的な展開を見せるのが、Louisa の夜9時の散歩の場面である。誰かの話し声が聞こえて少し怖くなった (“[S]he heard footsteps and low voices, ... and she felt a little timid.” 30) ところを見ると、この時刻に Louisa が家の外を散策するのは彼女には珍しい行動で、そうするだけの心理状態であったことが読み取れる。語り手は翌日の描写で、Louisa は駆け引きの材料を求めてその夜出かけたと言っているのだから、Louisa は Joe と Lily の逢瀬を予測していたことになる。“Louisa Ellis had never known that she had any diplomacy in her, but when she came to look for it that night she found it” (31). ここで Louisa は Joe と Lily の関係を、あらためて確認することになる。“‘I ain’t sorry ... that that happened yesterday—that we kind of let on how we felt to each other’ ” (30). しかし、Lily は身を引くという。“‘I’m going day after tomorrow.’ ” その理由は、Joe は14年間待った Louisa を裏切ることはできず、Lily もそのような不人情な男とは結婚できないからである。“‘I ain’t going back on a woman that’s waited for me fourteen years, an’ break her heart’ (30). ‘Honor’s honor, an’ right’s right. An’ I’d never think anything of any man that went against’em for me or any other girl; you’d find that out, Joe Dagget’ ” (31). これは Louisa にとって、婚約を解消する好機である。14年間も待った側にも、一方的に破談とするには相応の理由が要求される。もとより待たせた Joe には解消を申し出る資格はない。Joe の真意を掴みかねていた Louisa にとって、自分の奇妙な独身願望を理由に Joe に婚約解消を申し出られる状況

ではなかったが、彼の愛は別の所にありただ義務感のための結婚であることを知った今、一週間後に迫った結婚を中止できる目途が立った。Lilyの情愛の深さを知ったのも、別離の決断を後押しすることになっただろう。“I hope—one of these days—you’ll—come across somebody else—.” “I ain’t that sort of a girl to feel this way twice.” “Louisa heard an exclamation and a soft commotion behind the bushes; then Lily spoke again—the voice sounded as if she had risen.” Louisaの場所からは見えないが、ふたりが抱擁したように彼女には聞こえた、語られているようである。これにはさすがに「ぼうっとした」(“in a daze”)が、語り手はこの夜のLouisaに関する一切の感情もどんな行動も語っていない。

翌日、LouisaはJoeに婚約の解消を申し出る。そこには破談を匂わす言葉はなく、互いに本心を容易に知られまいとする態度であったが、「何とか合意に達した」(“[T]hey finally came to a understanding” 32)。婚約解消を伝えた晩にLouisaが涙を少し流す場面があり、論議を呼ぶ。“Louisa, all alone by herself that night, wept a little, she hardly knew why;” (32) 後述のJoseph Csicsilaは、Louisaもさすがに人間だから悲しむこともあると突き放すが、この場面はほとんど唯一Louisaが感情を発露した機会であり、それは軽視できない。無為に流れた14年間の若い年月に対する惜別の涙と理解するのが因習であろうか。一方で、少しでも涙が出たその理由は自分でもわからないという。これがLouisaの人物造形の基本線に沿っている。この引用に続くのは、これまでとは別の段階に達したLouisaである。“[B]ut the next morning, on waking, she felt like a queen who, after fearing lest her domain be wrested away from her, sees it firmly insured in her possession” (32). Louisaは長い娘時代を経て、今や一国一城を治める女王となったのである<sup>8)</sup>。また、時に問題となる、創世記25:27-34のエサウにLouisaを例えた作者の真意について、Csicsilaは簡潔に文字通りの解釈をしている。つまり、エサウがあつもののような詰らないものと引き換えに長子としての相続権をヤコブに譲ったように、Louisaも価値の低いものを選び、高いものを捨てた。補足するなら、LouisaはJoeが14年間かけてオーストラリアで作った財産を事実上共有し相続する権利をもつにもかかわらず、その14年間続けた慎ましやかな生活の延長を選んだ。聖書ではエサウはたいへん愚かな選択をしたこととされている。Louisaも経済的にはまったく愚かな選択をしたということであろう。まして、ローマ人への手紙9:13には、「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」とある。神の意に沿わない選択をしたLouisaを尼僧に——しかもニュー・イングランドの——例えたのは、たいへんな皮肉である。

Monika M. ElbertはThorstein Veblenが活写する、conspicuous consumptionの現れとして、Freemanの描く女性たちを取り上げている。“Even if many of Freeman’s women are poor, or living on the edge of poverty, they participate in the fantasies and desires of the middle class. As Thorstein Veblen observed, even the classes below the leisure class tried to emulate the upper class by consumption.”<sup>9)</sup> しかしLouisaは「誇示的消費」を少なくとも表面的には楽しめない。経済的に困窮している様子は見られないが、裕福であるとはとうてい考えられないからである。そもそも収入はないであろうし、家財以外の遺産がどれだけあるのかわからない。彼女の経済活動は小さな家と庭の内側で完結しているかのような有様で、町に出て買い物をしているようには見えない。



だがそれでも、Louisaはささやかな消費ではあるが「誇示的消費」の跡を隠しているわけではない。Louisaはリネン、前掛け、磁器、銀器、ハーブ、エッセンスを文字通り、収集している。刺繍の施されたリネンのテーブルクロスや前掛けなど糸から手製したわけではあるまいし、磁器や銀器の茶器を毎日使用することが近隣の噂になっているほどである。来客用に前掛けを使い分けしているのと同じように、磁器も来客用に別に揃えてあると見られていたのだろう。居間のテーブルに置かれた古いサイン帳や母の形見の *The Young Lady's Gift-Book* は過去への執着や保守性とともに装飾品への愛着を示している。サイン帳も本も、他の嗜好品と同様に整然と並べられ、Joeが上下を逆に置くことは許されない。Louisaが隠さない、こうした品物へのフェティッシュな執着は、彼女の自己イメージを投影している。語り手はLouisaが主客転倒している様を示唆する。“[She] had been a veritable guest to her own self.” Louisaのモノへの耽溺と自己投影は日々の生活の中で儀式化される。モノへの執着は、実体を失った愛の対象に対する代償として行われている。14年間もの婚約者の不在は、母と兄の死とともに、Louisaを社会性に欠けた偏狭な人間に変えた。それは、モノの蓄積、それへの執着、それとの同一化という過程を経て顕在化した。Joe Daggetが14年ぶりに見たLouisaは、人に冷淡で、モノへの偏愛を隠さない人物だった。小さな家に蓄積し整然と並べられたモノは、すでに“a very part of her personality”となっていた。モノと一体化し未分化となったLouisaの、些細な事物に対する偏愛を「芸術家」と賞賛した誇張した語りは、皮肉にしか聞こえない。芸術家に匹敵する情熱を何に傾けるかと言えば、窓拭きであり引き出しの整理整頓である。清潔で丁寧な生活態度への賞賛ではなく、詰らない拘泥に対する揶揄であろう。

Joseph Csicsila<sup>10)</sup>は、この作品は“self-imposed alienation from the community”という点で、Hawthorneの伝統に連なると指摘している。Emerson的Natureが広がるNew Englandの風景にあって、Louisaの家の中は人工そのもので、この「無菌」的禁欲は「外界の自然からの精神的断絶」を暗示していると言う。確かに、HawthorneのWakefieldは詰らない好奇心から妻の許から失踪し、妙な虚栄心からその状態を数十年続けたあげく、“the outcast of the universe”となった。Louisaも狭量な自己満足を飽かずに追求したあげく、自らをcommunityから永久に追放する。自ら進んでその立場に身を置いたつもりが、年月とともに世代交代が進み、やがてはFaulkner描くEmilyがそうであるように、町の記念碑と見なされる存在となろう。Caesarには飼い主がいるが、すでに天涯孤独なLouisaには誰がいるのだろうか。母はすでになく、兄は早世、父親はいたとしても早死に、こうした環境でLouisaは徒に非生産的な趣味の生活を満喫してきた。仮に婚約者がオーストラリアから生活費を送金していたとしても、それも間もなく途絶える。今後も磁器の茶器を常用できるのだろうか。消費する以上にエッセンスを蒸留しては貯め込み、ただ裁縫の楽しみそれ自体のために縫っては解くような生活は持続可能だろうか。近隣社会の経済活動に自ら溶け込んでいない彼女にとって、現金の蓄積は欠かせないものであるが、家計は一体どうなっているのだろうか。今後どうなるのだろうか。女性の精神的自立を主題のひとつとしたと思われる小説は少なくないが、経済面でのリアリティへの配慮はなされているように感じられる。“The Story of an Hour” 然り、“The Yellow Wall Paper” 然り、“A Rose for Emily” 然りである。“A New England

Nun”は例外に属するが、この点をあげつらわないのが、literary conventionなのだろう。人間の行動を決定するのに経済的配慮は欠かせず、これに欠けるとリアリティを著しく損なう。小説の登場人物は寓話的人物へと転化してしまう。主人公の行動にあまり合理的な説明を求めない点で、Hawthorneの短編小説の登場人物に近く、この意味でもFreemanの短編はHawthorneの伝統を継いでいると言えるのだろう。

## 注

- 1) 本稿では以下のPenguin社版を用い、引用はこの版に基づく。Mary E. Wilkins Freeman, *A New England Nun and Other Stories*. London: Penguin, 1891; 2000.
- 2) “A New England Nun”冒頭部にはThomas Grayの“Elegy Written in a Country Churchyard”を踏まえていると目されている個所がある。“The curfew tolls the knell of parting day, / The lowing herd wind slowly o’er the lea, / The ploughman homeward plods his weary way, / And leaves the world to darkness and to me.” FreemanがGrayの“Elegy”を下敷きにしたと仮定し、作者はLouisaの芸術家としての才能が開花しなかったことを惜しんでいると評するのが、Deborah M. Williamsらの立場である。彼女の解釈では、このGrayの詩は、Milton並みの才をもちながら詩作の機会に恵まれず人知れず死んでいった者たちを悼んでいるという。“[T]he speaker wonders if the rural churchyard might contain the remains of people who had great talents that became stunted or went unrealized and unrecognized because of poverty, ignorance and lack of opportunity.” Deborah M. Williams, “An Overview of ‘A New England Nun,’” *Gale Online Encyclopedia*. Detroit: Gale, 2013. *Literature Resource Center*.
- 3) Freemanが1886年4月28日付で書いた手紙にCaesarと似た境遇の犬についての記述があり、Caesarのモデルとされてきた。ここにはJoeの使う“cruel”に近い表現はないが、犬に対する深い同情は無視できない。“[T]here was a poor old dog, who had been chained thirteen years, because he bit a man once, in his puppy-hood. I have felt like crying every time I have thought of him. He wagged his tail, and looked so pitiful, he is half blind too.” (Brent L. Kendrick ed., *The Infant Sphinx: Collected Letters of Mary E. Wilkins Freeman*, Metuchen, N. J. and London: The Scarecrow Press, 1985, p. 69.) 作者FreemanとLouisaの近似性についての言及は多かったが、一方で、作者の批判的扱いを指摘する批評も少なくない。ここでの引用部は、作中の聖書への言及とともに、作者の主人公に対する批判の論拠とされている。
- 4) 前掛けの一着一着が処女性を象徴的に防御しているとのMarjorie Pryseの論を引きつつ、Joeの来訪の前に前掛けを二着も脱いだのは、Louisaが結婚を間近に控え防御を緩めていると、Couchは指摘している。その解釈は興味深い。作者は最後に残した純白の前掛けは、その上に巻く仕事用の前掛けとは異なり、来客に應對するときに身につけると明言しているため妥当性は低い。“Under that [her pink-and-white apron] was still another—white linen ... that was Louisa’s company apron. She never wore it without her calico sewing apron over it unless she had a guest” (23). またCouchはJoeのことを紳士ではなく、Louisaの前で性衝動を抑えているとみなしている。しかし、その根拠も弱い。“Whereas Joe is a gentleman in the presence of Louisa, we are given a hint toward the ending of the story that he is suppressing his sexuality while near her. After Lily’s passionate speech to Joe, ... we are told that ‘Louisa heard an exclamation and a soft commotion behind the bushes.’ ... From what we are told, we can only assume that they have engaged in a passionate embrace, a burst of physical activity brought on by emotions ...” そもそも上記の類推を可能にする論拠は質量とも十分に示されていないのではないか。JoeとLilyが抱擁していたとの解釈は正しいが、Lilyは若い美人であり、Louisaは実年齢よりも老

けて見えることを忘れてはいけない。JoeとLouisaは14年間手紙すら満足にやりとりしなかった。財産を作るまでLouisaの許に戻るつもりもなく、それがとうとう14年に及んでしまった。Louisaは婚約者であったが、その程度の愛情しかもたれなかった。それでもLouisaと結婚するのは、いみじくもLilyが看破したように、Joeは結婚することで婚約者の名誉を守り、無残に打ち捨てた14年間の責任を取ることで自分の名誉を守るためだった。まさに、“Honor’s honor” (31)である。Ben Couch, “The No-Man’s-Land of ‘A New England Nun,’” *Studies in Short Fiction* 35.2 (Spring 1998): pp. 187–98. Rpt. *Short Stories Criticism*. Vol. 113. Detroit: Gale. From *Literature Resource Center*.

また、David H. Hirschはフロイト主義の立場からLouisaの精神分析を行う。現在では反論を免れない分析が目立つが、骨子は依然有益である。Louisaの本心を忖度せず結婚の約束を果たそうとするJoeは、彼女にとって性的脅威そのものであり、鎖でつながれたCaesarは、今は辛うじて制御されているが、いつ襲い掛かるかわからない性的脅威の象徴である。そして、Joeが訪れるとそれを恐れたように羽ばたくカナリアは、ユングが鳥は魂の表象と言うように、冷静な態度とは裏腹にJoeを恐れるLouisaの魂の表象である。JoeとCaesarは同じ属性であるゆえ、CaesarはJoeの前でひときわ従順であり、JoeがいずれCaesarの拘束を解き解放したいというのは当然である。こうした前提に立てば、Louisaが思い描く、Caesarに襲われ血の海に倒れる子供たちの姿は、婚姻に伴う破瓜を恐れるLouisaの心理を投影したものであると断じるHirschの主張は妥当であろう。だが、Louisaが婚約を解消する理由は様々であるにしても、また、これもその一部ではあるにしても、それでもこれは理由としては弱い。Louisaの深層心理はイメージ化されたJoeやCaesarを恐れているかもしれないが、生身の彼女自身はこの両者に気後れするどころか支配下に置いている。凶暴だったCaesarを14年間抑え込んでいたのも、Joeにぎこちない態度を取らせ続けた末に、婚約解消を言い出したのも、Louisaである。彼女が結婚によって失われると深く懸念するものは、処女性ではなく、この14年間に蓄積し整然と保管してある彼女の私物である。他人にとってはエサウのあつもの程度の価値しかなくても、彼女にとっては相続権を放棄するに値するものである。David H. Hirsch, “Subdued Meaning in ‘A New England Nun,’” *Studies in Short Fiction* 2.2 (Winter 1965): pp. 124–36. *Short Stories Criticism*. Ed. Anja Barnard. Vol. 47. Detroit: Gale Group, 2002. From *Literature Resource Center*.

- 5) Gregg Canfieldはフロイト学派とは対照的にFreemanのユーモアを強調し、Louisaが三枚重ねの前掛けを常用し必要に応じて一枚また一枚と脱いでいく様子は、滑稽であるとしている。“Louisa’s motions, if one surrenders psychoanalytic seriousness, are funny even as they speak to her motivations. Consider the Chinese-box parade of aprons with which Louisa covers her genitals. Through the story, she dances a dance of a thousand veils, removing one apron after another only to reveal yet further protection below.” Gregg Canfield, “‘I Never say Anything at Once So Pathetic and Funny’: Humor in the Stories of Mary Wilkins Freeman,” *American Transcendental Quarterly* 13: 3 (Sept. 1999): pp. 215–31. Rpt. *Short Stories Criticism*. Ed. Anja Barnard. Vol. 47. Detroit: Gale Group, 2002. From *Literature Resource Center*. この場面は、何かと過剰に心配するLouisaの人物像を示すとともに、この人物は本人の意識とは裏腹に滑稽な人物であることを暴かんとする作者の底意を感じさせる。また、Susan K. Harrisはフェミニストの立場から論じているが、作品に潜むユーモアを評価する点で例外的である。“Louisa’s feminine virtues are so exaggerated as to be parodic …” 度が過ぎて風刺になっていると指摘する箇所は、リネンを縫うその喜びのために繰り返し縫い目を解くLouisaの非生産的な姿と、三着の前掛けを自分で決めた順番で身につけ、それを自分で決めた用途に応じて一枚また一枚と脱いでいく様子で、「女らしさ」を過剰に表現しているとしている。Susan K. Harris, “Mary E. Wilkins Freeman’s ‘A New England Nun’ and the Dilemma of the Woman Artist,” *Studies in American Humor* 3.9 (2002): pp. 27–38. *Short Stories Criticism*. Vol. 113. Detroit: Gale. From *Literature Resource Center*.
- 6) Carlson & Siletに記されているとおり、結婚後に相手のペースに飲み込まれるのはJoeのほうがかもしれな

- い。“What would happen to Joe if he married her is symbolized in part by her caged canary, which always flutters ‘wildly’ when he visits as if to warm him of his fate.” カナリアが象徴するものを、Louisaの処女性や静謐な生活などが脅かされつつあることへの警鐘であると捉える批評が溢れるなかで、この解釈は斬新である。この執筆者はこの解釈の妥当性を証明していないが、Louisaを訪問しているときのJoeのぎこちなさや数々のちょっとした失態、Joeを迎えるLouisaの終始冷淡な態度を見れば、このふたりの結婚生活はやがてLouisaに合わせた形で落ち着くだろうと予測できる。この解釈では、カナリアが雄であるほうが都合がよい。婚姻に対するLouisaの過剰な不安は、一歩たりとも譲歩しない偏狭さを示している。Larry A. Carlson, Karin A. Silet, “Mary E. Wilkins Freeman,” *Critical survey of Short Fiction*, Second Revised Edition, January 2001, pp. 1-5.
- 7) 出版当時の評論では、短編集*A New England Nun*はNew Englanderの気質や言動をよく捉えていると評されている。早くも出版後まもなく、人物描写の斬新さとリアリティを両立させていると評価されていたことがわかる。“More frequently [Freeman] makes us exclaim with admiration over the novelty, yet truthfulness, of her portraiture, as in ... the story which gives the title to her book.” (“New England in the Short Story,” *The Atlantic Monthly*, 67. 304 (June 1891): pp. 845-50. Rpt. in *Twentieth-Century Literary Criticism*. Ed. Dennis Poupard. Vol. 9. Detroit: Gale Research, 1983. *Literature Resource Center*. Web. 24 July 2013). また、当時のNew Englandではかくも長い婚約期間は稀ではなく、Freemanの他の短編小説にも散見されると、Perry D. Westbrookは指摘している。“Such lengthy engagements were, in fact, not uncommon in New England at the time; they are found quite frequently in Freeman’s stories.” Perry D. Westbrook, “A New England Nun: Overview,” *Reference Guide to Short Fiction*. Ed. Noelle Watson. Detroit: St. James Press, 1994. From *Literature Resource Center*.
- 8) Louisaが身を引く決断を下したその理由を、Marylynne Diggsは“self-sacrifice”ではなく“self-determination”と捉え、LouisaをRip Van WinkleやNatty Bumppoに代表される、個人の自由自律のために婚姻を忌避する人物の系譜に連なる扱いをしている。“... Louisa Ellis more closely resembles the heroes of American Renaissance fiction who, like Washington Irving’s Rip Van Winkle or James Fenimore Cooper’s Natty Bumppo, preserve their autonomy by refusing to be coupled.” もちろんRip Van Winkleは独身ではないが、高圧的な女房に虐げられたまさに“henpecked”な状態から長きにわたる逃亡を図った点で、この系譜の嚆矢とすべき存在であろう。Marylynne Diggs, “Mary Eleanor Wilkins Freeman,” *American Women Prose Writers, 1870-1920*. Eds. Sharon M. Harris, Heidi L. M. Jacobs, and Jennifer Putzi. Rpt. *Dictionary of Literary Biography* Vol. 221.
- 9) 引用は次の論文に基づく。Monika M. Elbert, “The Displacement of Desire: Consumerism and Fetishism in Mary Wilkins Freeman’s Fiction,” *Legacy* 19.2 (2002): pp. 192-215. Rpt. *Short Story Criticism*. Vol. 113. Detroit: Gale. From *Literature Resource Center*. 語り手がLouisaを芸術家に例えている点に関して、字義通りLouisaを芸術家と認める批評は少なくないが、Elbertは辛辣である。“All the repetitive and monotonous activities of Freeman’s fetishistic women ... can be seen as symptoms of their thwarted creativity. Reduced to inchoate desires and inarticulate longings, the women latch onto the commodity fetish, which becomes an emblem of their wasted and paralyzed lives, as evidenced in their failed maternity, failed artistry, and failed sexuality.” なお、Marjorie Pryseは、Louisaをartistとみなす語り手の評価を受け入れ、婚姻によって芸術家でいられなくなることが、婚約解消の理由であると推論している。“Marriage will force her to relinquish ‘some peculiar features of her happy solitary life.’ ... She will also lose the freedom to express herself in her own art. ... Her art expresses itself in various ways. ‘Louisa dearly loved to sew a linen seam, not always for use, but for the simple, mild pleasure which she took in it.’ Even in her table-setting, she achieves artistic perfection. Unlike her neighbors, Louisa uses her best china instead of ‘common crockery’ every day — not as a mark of ostentation, but as an action which enables her to live ‘with as much grace as if she had been a veritable guest to her own self.’” Marjorie Pryse, *An Uncloistered ‘New England Nun,’*” *Studies in Short Fiction*, 20.4 (Fall 1983), pp. 291-92.

- 10) Joseph Csicsila, "Louisa Ellis and the Unpardonable Sin: Alienation from the Community of Human Experience as Theme in Mary Wilkins Freeman's 'A New England Nun,'" *American Literary Realism* 30.3 (Spring 1998): pp. 1-13. Rpt. *Short Stories Criticism*. Vol. 113. Detroit: Gale. From *Literature Resource Center*. Csicsilaはカナリアを Louisa の "caged existence" の象徴と捉え、Joe はただいだけで Louisa の家の秩序を乱す存在であると言う。一方、Louisa が実年齢以上に老けて見えるのは、"ominous suggestion of lifelessness" であるとし、結婚生活への過大な不安は、平常な人間相互の関係への嫌悪に由来すると見ている。"Not surprisingly, the horrors of Louisa's new life involve and demand the very fundamentals of human interaction: a domestic family, an extended family, and communal social relationships." これらを一見何の苦もなく成し遂げる Lily が特別な存在なのではなく、Louisaこそが特異な精神の持ち主であると言える。